

# 哲學研究

第二百五十三號

第二十二卷  
第四冊

## 實踐と對象認識（承前）

——歷史的世界に於ての認識の立場——

西田 幾多郎

### 三

知るといふことも、「今此處に」といふことから出立せなければならぬ。我々は歴史の世界から生れ、此故に身體を有ち、我々は身體的存在であると共に身體を道具として有ち、自己矛盾的に物を見るといふことに基かなければならぬ。知識の立場と云つても、我々は歴史の外に立つことではない。當爲といつても、行爲的直觀の現實の矛盾から起るものでなければならぬ。然らざれば、單に形式的たるに過ぎない。知るといふことも、一種の形成作用として、認識形式といふものを有たなければならぬ。併し知識を形式から考へるといふことも時代的でなければならぬ。何時でも今であり、何處でも此處であるから、今此處といふことは抽象的にして無内容とも考へられる。

併しそれは今此處といふことを對象的に考へるからである。今此處は認識對象とはならないものである。今として擱まれたものは今ではなく、此處として踏まへたものは此處ではない。併し今此處から事實の知識が成立するのである。實驗といふのはいつも、今此處に於てでなければならぬ。今此處に於て、擱まれないものが擱まれるのである、我々は自己矛盾的に（身體的）に物を見るのである。認識と歴史的實在との接觸點は此にあるのである。故に何時でも今、何處でも此處であるから、今此處は抽象的にして無内容と考へる代りに、それは何處までも對象化することのできない具體的内容を有つと云ふことができる。私が現實に於て我々は觸れることのできない絶對に觸れて居ると云ふのも此故である。絶對に自己を越えたものに接する所が、今此處である。今此處といふものは、何處にもないと云ひ得るであらう。併し今此處はいつも現前して居るのである。今此處といふのは考へることによつて定まるのではなく、私が身體的に物を見て居る所が今此處であるのである。そこでは我々は考へられた世界に對して居るのではなく、我々の思惟の二者擇一を決する實在に對して居るのである。今は晝であると云つても、若干の時を過ぐれば今は夜となる、故に今は無内容であると考へられる。單に今といふ語の意味を考へれば、爾云ひ得るでもあらう。併し今といふのは、いつも行爲的直觀的に決定せられた、他によつて代へることのできない具體的内容を有つて居るのである。今といふのは、直線的に考へられる時の一點といふ如きものではなくして、そこ

に過去未來が同時存在的と考へられる立場である。瞬間に於て永遠に觸れるといふのは、時を直線的に考へる場合に於て云ふのである。併し云ふまでもなく過去未來が同時存在的といふのは自己矛盾である。今は今自身を越えて進むのである。而もそれは絶對を離れるといふことでない。矛盾の自己同一から矛盾の自己同一に行くのである、今から今に行くのである。斯く云ふのは、時が可逆的だなどと云ふのではない。絶對は何處までも絶對である。絶對は對象化することはできない。對象化的方向に於て、我々は絶對に近づくといふことはできない。而も我々はいつも絶對に接して居るのである。故に自己矛盾的なのである。絶對矛盾の自己同一として時は何處までも非可逆的である。現實の歩は絶對に決定的である。而も現實はいつも現實を越えるが故に現實である。然らざれば、現實は單に考へられた現實に過ぎない、生きた現實ではない。多くの人はいつもかゝる現實を考へて居る。主知的自己の立場に立つか、行爲的自己の立場に立つかによつて、現實といふものの考が變つて來るのである。

絶對といふものは媒介によつて現れるものではない。媒介によつて現れるものは何處までも相對である。此故に絶對は何處までも絶對であつて、絶對は近づき得るものでもない。然らばと云つて、絶對は單に隠れたる始にあると云ふのでもない、唯何處までも潜在的と云ふのでもない。現實即絶

對と考へられるのである。併しそれは對象的に限定せられた現實が絶對だといふのではない。現實は動くものである、絶對は無限の動である。併し又單なる動は絶對でない、動くものは相對である。絶對は動いて動かざるものでなければならぬ。故に現實はいつも現實を越えたもの、非現實的なものに對する、現實は無限の周邊を有つ。現實の何處までも自己自身を否定する立場に於ては、我々は無限なる表現の世界に對する。それが意識の對象界である。併し現實は何處までも自己形成的であり、創造的である。形成せられた世界が形成し行くのである。此故にそれが現實であるのである。形成するといふことは、動くものが自己自身を止めて見ることである。現實の立場に立つて、絶對靜を背景として世界を見る時、それが認識對象界である。無限の過去未來に互る世界を、現在に於て同時存在的立場に於て見るのである。全世界を空間的に見るのである、過去として見るのである。そこに我々は全然受動的と考へられ、唯、實在を映すとも考へられるのである。併し現實は動きつゝあるのである、歴史的地盤は搖れつゝあるのである。固定せられたものは、動く現實ではない。それは否定面に映されたる抽象的影像たるに過ぎない。加之、固定すること、そのことが動くことである。而して動が即靜なるが故に、固定することは又固定せられることである。故に對象認識といふことは實在を映すといふことではなくして、表現作用的に表現することである。描き出されるものは、固定せる死物ではなくして、何處までも生きたものでなければならぬ、歴史的

命でなければならぬ。描き出されたものは、實在の影像ではなくして、生命の表現でなければならぬ。そこに知識の客観性があるのである。斯く認識を表現作用的と考へる時、そこに所謂認識論者の云ふ如く構成といふ如きことも考へられるであらう。唯、認識形式といふものも、歴史的現實の自己限定を離れてあるのでなく、歴史的地盤に於て成立し、歴史と共に動き行くものでなければならぬ。固定せられた絶対的知識といふ如きものがあるのではない。いつも現實の立場から現實を越えることによつて、過現末を包む世界が考へられ、逆に現實をその自己限定と考へ得るかぎり、客観的知識が成立するのである。

私は歴史的實在の世界は、始から終まで、何處までも辯證法的自己同一と考へる。非辯證法的の世界から辯證法的となつて來るのではない。いつも辯證法的自己同一から辯證法的自己同一へと行く。それがいつも現在に過去未來が同時存在的といふことである。故に現れるものは既に有つたものであると云つてもよければ、逆に無から有が生ずる、一々が新なものだと云つてもよい。辯證法的自己同一とは、この二つが一つであると云ふことでなければならぬ。それが世界が創造的であると云ふことである。ドゥ・ブローリーの云ふ如く、ブルスムによる分析の前に無色の光線の中に七色があつたと云へば、あつた、併しそれは我々が實驗をすれば、現れるといふ意味に於てあつた。

眼といふものができない前に、色といふものがあつたのであるか、あつた。併しそれは眼といふものであれば、見えるといふ意味に於てあつたのである。併しそれは眼が色を創造すると云ふことではない。現在に於て現れるものはすべて既にあつたものである。現在と云へば、過去から結果として、無限に潜在的なるものの合成的結果とも考へる。併し潜在的なるものを、如何程積み重ねても、顯現的とはならない。逆にデュナミスはエネルギーの影とも考へることができる。現在は過去未來から定まると考へることもできれば、過去未來は現在から定まると考へることもできる。眞の現在にかゝる矛盾の自己同一でなければならぬ。それが過去未來が現在に同時存在的といふことである。現實はかゝる矛盾の自己同一として、何處までも創造的であり、自己矛盾的に自己自身を形成して行く。それが歴史的生命の方向である。そこにはベルグソンの創造的進化といふ如きものをも認めることができる。唯、それはベルグソンの純粹持續といふ如きものではなくして、作用的でなければならぬ。現實はいつも現實を越えたものである。その故に生きた現實である。現實はいつも動搖して居る。併し現實は唯、動搖的であるのではない。現實はその根柢に於て自己矛盾的なるが故に、動搖的なのである。現實はいつも危機の上に立つが故である。現實は現實の底に自己自身を否定すると共に肯定するものに接して居るのである。いつも世界の始と終とに接して居るのである。是故に、現實に於て、我々は絶對に接して居るといふのである。無論、絶對といふ

のは、接するとか近づくとかと云ひ得るものではない。絶對は不動の動である。併し現實が自己矛盾的に自己を越えて絶對に向ふ方向が、世界の自己自身を創造し行く方向であり、その逆の方向が世界が亡び行く方向である、墮落の方向である。前者は生の方向であり、後者は死の方向である。パスカルは神に於ては相反する兩端が結び附いて居る、人間は兩端の間にさ迷ふものであると云ふ。而して神を離れる時、人間は自愛と回避とに陥ると考へて居る。又デイドローの「ラモーの甥」に於ける如き自己疎外的意識の世界も、かゝる傾向に基くものでなければならぬ。創造的世界が一面に非創造的といふのは背理と考へられるが、創造といふことは、唯内面的必然の發展といふことではない。然らばと云つて、外からの恣意といふことでもない。世界がいつも自己自身を否定すると共に肯定するものであり、それは自己矛盾なるが故に、自己矛盾的に必然的な方向を有つ。必然的な方向といふのは生きる方向である、私の所謂行爲的直觀の形成的方向である。世界は自己矛盾的に必然的方向を有つといふことが、世界が魂を有つといふことである。死の方向といふものがなければ、生の方向といふものもない、亡び行く方向といふものがなければ創造といふ方向もない。現實に於て何處までも觸れることのできない絶對に觸れると云ふのは、かゝる意味に於てでなければならぬ。そこにはいつも現實に於て、現實を越えて、過去未來を包むもの、即ち全體的なものに觸れるといふことがなければならぬ。それを現在に過去未來が同時存在的と云ふのである。現實

は現實に於て現實を越えるものなるが故に、自己矛盾的であり、自己矛盾なるが故に、必然的方向を有つ。方向を有たないものに自己矛盾といふものがないと共に、限定せられた唯一つの方向を有つものにも自己矛盾といふことはない。無にして有なるもの、自由にして必然なるものが、眞に自己矛盾的な存在である。眞の辯證法的實在の世界とは、此の如きものでなければならぬ。私の從來の如き言表を以てすれば、現實は連續と非連續との矛盾的自己同一である。或はそれを個物的限定と一般的限定との自己矛盾的同一と云つてもよい。現實は連續と非連續との間に自己動搖的である。而もそれは矛盾的自己同一として、その根柢に於て創造的なものに觸れるといふ意味に於て自己形成的である、全體的方向を有するのである。生物的世界に進むに従つて、益々自己形成的となる、世界が個性的となる。斯くして現實は常に動搖し、不安の上に立ちながら、全體としていつもそれ自身の方向を有し、行爲的直觀的に自己自身を形成し行くのである。それが世界の連續である。世界は行爲的直觀的に連續するのである。それを非連續の連續といふのである。そこに連續といふものがないとは云はない、世界は唯、非連續的に變ずるといふのではない。併しそれは唯、潜在から顯現にといふ如きことではない。現實はいつも創造的なものに接して居るのである。逆に顯現から潜在が考へられるのである。今日の生物が原始生物に於て潜在的であつたのではない。原始生物は原始生物としてそれは特殊の形であつたのである。



現實は辯證法的自己同一として現實でありながら即ち決定せられたものでありながら、いつも現實を越えるといふことを含んだものであり、現實は常に動搖的である。併し現實が辯證法的自己同一として斯く動搖的であるといふことは、その根柢に於て創造的なものに觸れるといふことである。創造的なものに觸れるといふことは過去未來を包むもの、世界歴史的なるものに觸れるといふこととである。そこに現實は現實固有の方向を有つ。それが創造的方向であるのである。此に我々は現實に於てありながら、全世界を同時存在的に見る、空間的に見るといふ知識の立場もあるのである。認識對象界といふのは、かゝる立場から見られる世界でなければならぬ。所謂認識主觀といふも、歴史的世界の外に成立するのでなく、歴史的に形成せられた現實から、世界を同時存在的に見る立場に外ならない。いつも歴史的世代に即しながら、而も絶對的な立場といふものが考へられるのである。眞理とは、いつも創造的なものの自己表現でなければならぬ。現實が現實を越えると考へられる時、現實の世界は無限に表現的でなければならぬ。その亡び行く方向に於ては、それは無意義なる表現の世界である、噂話の世界である。行爲的には迷の世界である。併し創造的なもの、世界歴史的なるものの自己表現として、我々は眞理といふものを認識するのである。そこでは、我々は最も深い創造的なものに繋るのである。我々は創造的なものの自己表現作用となるのである。私は最初に我々が身體的に物を見るときが、既に辯證法的に形を見るときといふことであると

云つた。我々はその時、既に歴史的自己であるのである、創造的世界の創造的要素であるのである。我々は身體的存在であると共に、身體を道具として有ち、行爲的直觀的に物を見て居るのである。知覺といへども、單に受働的なのではない。例へば、物の視覺形といふ如きものも、眼と手の運動との結合によつて成立するものでなければならぬ。而して我々は我々の具體的知覺から、記憶といふものを全然除去することはできない。ベルグソンの云ふ如く、我々は薔薇の花に於て過去の思出を嗅ぐのである。併し我々の普通、知覺と考へて居るものは動搖的である、不完全な形である。物そのものの形と云はんよりは寧ろ我々の道具としての形である。然るに藝術家は行爲的直觀的に物を見て行くのである、創造的に物を見て行くのである。眞に物そのものを見るのである、自己が物の生命に繋るのである。テイ・エス・エリオットは云ふ。テニンソンやブラウニングは詩人である。併し彼等は考へた。彼等は思想を薔薇の香の如く直感せなかつた。然るにドンには思想が經驗であつた。それは彼の感覺を變じた。日常人の經驗は混沌的であり、不整齊であり、斷片的である。詩人は異種的な經驗を合金化すると (The metaphysical poets)。昔、プラトンが、物はイデアを分有することによつて種々の形を有つと考へた如く、イデアといふのは行爲的直觀の形でなければならぬ。併し私の行爲的直觀といふのは、かゝる藝術的直觀の如きものを云ふのではない。却つて具體的知覺といふものが動搖的であり、藝術的直觀的に創造的であるといふことは、それが歴史的身

體的であり、過去未來が現在に同時存在的といふ歴史的現實の性質を有することを證するのである。思惟的ならざる具體的直覺はなく、直覺的ならざる具體的思惟はない。直覺と思惟とはいつても矛盾的自己同一なる行爲的直觀の相反する兩端であるのである。ヘーゲルが現象學の序文に於て、(直觀に反對しながらも)媒介といふも、自己自身を動かす自己同一 *die sich selbst bewegende Sichselbstgleichheit* に外ならないといふ媒介作用といふのは、行爲的直觀的でなければならぬ。然らざれば、それは一面に直接的であることはできぬ。直接的なるものの自己媒介といふことなくして、絶對が自己自身を媒介するといふことはできぬ。單なる媒介より自己同一なるものは出ない。歴史的現實に於ては、現れるものはすべてあつたものである。現實は潜在的なものの結果である。併し又逆に潜在的なものは、顯現的なものの反映である。かゝる矛盾の自己同一として歴史的現實の世界は無限なる混亂の世界と考へることができ(世界は歎きの谷である)。創造的なればなる程、然云ふことができる。現在といふのは矛盾の自己同一として形作られたもの、創造せられたものである。それは定まつた形を有つものである。併しそれは又自己矛盾として自己自身を破つて行くものである。破ることは又作ることであるのである。そこには、いつも全體的なもの、世界歴史的なるものが働くのである。私はこゝにもベルグソンの創造的進化を想起せざるを得ない。流れ出る灼熱の鎔鐵がすぐに外殻を作る如く、生命の流は固定した形を取るのである。併し又私はベルグソンと反對

に、形作ることを生命の本質と考へるのである。生命はいつも死をその契機として含んだものでなければならぬ。然らざれば、實在的生命でない。我々は現實に於て固定した形を有つのである。生物の種といふのもかゝる形である。無論、創造的世界の立場からは種も創造せられたものでなければならぬ。現在の種も無限の可能の一つと云ふことができる。比喩的には、ライプニッツの如く、神は無限に可能な世界から最善の世界を作つたとも考へ得るであらう。創造的世界は始より終まで動搖的でないければならぬ。併し兎に角我々は現在に於て固定せる種の生命として生命を有つ。我々の生命は單に生物的種の生命ではない、歴史的に限定せられた歴史的種の生命である。我々は歴史的身體的に生きて居るのである。而もベルグソンが生物の形態といふものを生命の流が物質面を突破した痕跡と考へる如く、今日の生物の形態といふものも固定せるものではない、進化の途中にあるのである。是故に現實は所謂實踐的世界として固定せられたものでありながら、無限の過去未來がそこに同時存在的として無限なる傾向を有すると共に、現實は固定し静止せるものではなくして、辯證法的自己同一として、それ自身の方向を有し、自己自身を形成し、自己自身を創造し行くのである、いつもその底には世界歴史的なるものが動いて居るのである。かゝる世界の創造的要素として我々は眞に自由なる個人であるのである。私の何處までも自己自身を限定する個物といふのは、此の如きものでなければならぬ。それは種を離れた抽象的な個人といふのではなく、

却つて現實の種から生れ、種を形成し行くとも考へられるものでなければならぬ。

種々なる傾向を有し、始終動搖的なる現實に於て、我々が創造的なるものに繋る、世界歴史的なものに觸れるといふのは、何を意味するか。眞の具體的立場から（それが眞に經驗的立場といふものであるが）考へるには、我々が行爲的直觀的に物を見る、即ち我々は身體を有つといふことから出立せなければならぬ。そこに現實は世界歴史的には固定した形を有つて居るのである。行爲的直觀的に物を見る所に、現實といふものがあるのである。逆に現實が矛盾的自己同一として、自己自身を越え、自己自身を形成し行く所に、我々はかゝる世界の創造的要素として行爲的直觀的に物を見るのである。我々はそのに制作的身體を有つのである。我々の制作的身體といふのは、そこから生れるのである。現實が自己自身を限定する所に、形として種といふものがある。我々は種の個として種から生れるのである。併し我々は種の奴隸ではない。自己自身を越え自己自身を形成する現實の要素として、我々は身體的存在たると共に身體を道具として有つ。そこに現實に即しながら現實を越え、過去未來が現在に同時存在的といふことができる。かゝる立場からは世界は道具の世界となる、物はすべて道具的となる。我々は創造的世界の創造的要素として、世界が自己の身體となる、世界を道具として有つといふことができる。併し我々が身體的存在であると共に身體を道具として有つといふことは、我々が行爲的直觀的に身體的に物を見るに由るのである。辯證法的自己

同一として見るといふことと働くといふこととが一なるが故である。我々の自己が創造的世界の要素なるが故である。世界を自己の身體として道具とするといふことは、逆に我々は創造的世界の要素となることである、意識的自己を世界の内に没入することである。行爲的直觀的に物を見るかぎり、我々は創造的なるものに觸れるのである。從來は之を主客合一といふ。併しそれは唯、主も客もなくなるとか、全然受働的となるとか云ふことではない。我々が創造的となることである、世界の創造的形成作用に繋ることである。現實は歴史的に固定せられたものであり、我々はいつも固定せられた現實の形から出立しながらも、藝術家が創造的に物を見るといふ如く、行爲的直觀的に、それ自身に於て生きた形を見て行くのである。それ自身に於て生きた形といふのは、我々の自己がそれから生れる、我々の行爲がそれから成立すると考へられる形である。そこに見ることが働くことであり、我々は眞に自己矛盾的に物を見るのである（絶対に觸れるのである）。自己矛盾的に物を見るといふことは、作られたものが作るものを作るといふことである。そこに矛盾の自己同一として無限の生命があるのである。例へば、健全な社會といふのは生産者が消費者であり、消費者が生産者である社會でなければならぬ。それが眞に生きた社會である。然らざれば、それは自己矛盾として亡び行くの外ない。併しそれだけの社會では、尙創造的とは云はれない。創造的と云ふには、客觀的制作、歴史的形成といふものが中心とならなければならぬ。生産とは歴史的形成の意義でな

ければならない。消費といふのは歴史的身體的消費でなければならぬ、直觀的でなければならぬ。そこにパトス的に見られる形がなければならぬ、イデーがなければならぬ。それ自身に於て生きた創造的社會といふのは、一面に主觀的人間の否定でなければならぬ。何處までも物質的と考へられる。併し我々は歴史的制作から身體を有つのであり、そこに具體的な人間があるのであり、そこに矛盾の自己同一として世界の動き行く方向があるのである。現實はいつも自己否定を含み、現實は動搖的である。併し單なる固定は死であり、單なる動も滅亡である。現實を中心として無限の過去未來を含む世界が一つの生産作用と考へられる所、即ち現在が永遠の今の自己限定と考へられる所、そこに現實から現實へ動き行く現實の方向があるのである。そこに現在を中心として無限の過去未來が現在の背景となるのである。そこを中心として、すべてのものが生かされ、創造的となるのである。現實のかゝる方向に於てのみ、我々は歴史的制作に生き、行爲的直觀的に物を見るのである。我々が普通に知覺的身體的に物を見る時、既に自己矛盾的に見て居るのである。唯、それは歴史的身體的には固定せられた形である。溢れ出るエラン・グイタールの凝結せる外殻である(云はゞ單に見られる形である)。併しそれは矛盾の自己同一として自己自身を形成し行く生命の固定せられたものなのであり、歴史的生命の段階である。創造といふことは無から有が出るといふ

ことではない。我々の生命は固定せられた形から始まる。而もそれはいつも自己自身を越えるといふ意味に於て固定せられたものである。併しそれは行爲的直觀を離れて抽象的當爲に行くことではない。何處までも行爲的直觀的に矛盾的自己同一に行くことである、自己自身を形成するものに結合することである。いつも現實に於て現實を越えたものに接して行くのである（そこに具體的な眞の當爲があるのである）。翻つて知覺的生活に於て眼と手の運動によつて形成せられる所謂直覺的な形といふものも、かゝる形の中に含まれるものであり、非直覺的と考へられる近日の物理學的な法則も、像といふ語の意味を根本的關係が内部的矛盾を含まないことを明にする見方（矛盾的自己同一）といふ様に廣げることによつて像と云ひ得るであらう。それは却つて物理學的行為的直觀に徹底したものと考へることもできる。知覺像と結び附いてゐた古典的物理学は、却つてその不完全なものであつたと云ふことができる。

「抽象論理の立場からは、具體的なるものは特殊のと考へられる。併し特殊は一般の特殊として限定せられたものでなければならぬ。併し特殊は一般であるかぎり、自己自身を限定する特殊者として具體的と考へられるのである。生命は形を有つたものでなければならぬ。併し



單なる固定は死に外ならない。形は生命の固定せられたものでなければならぬ。固定せられた生命が、自己自身を否定して、自己自身を限定して行く、そこに眞の生命があるのである。我々は種から生れる、我々の生命は種の生命である。併し種がすぐ世界ではない。種は世界に於てあるのである。否、世界の自己形成が種的といふことができる。種がすぐ世界ではない様に、環境がすぐ世界といふのではないが、環境としての世界なくして種といふものはない。生命は環境を生命化して行く、即ち形成して行く、そこに生命があるのである。併し形作することは、形作られることである。生むことは、生れることである。生命といふのはかゝる矛盾の自己同一的過程でなければならぬ。普通には、それを唯過程的に考へて居る。併し私がいつも云ふ如くそれが眞に辯證法的であるには、そこに個と個とが絶對否定を隔てて相對し、辯證法的に相結合するといふことがなければならぬ。それは一即多、多即一の辯證法、場所的辯證法でなければならぬ(こゝに即といふのは矛盾的自己同一の意である)。例へば生物的生命に於ても、生産と消費との矛盾の自己同一と云つても、それは直接に(主語的に)結合すると考へられるかぎり、眞に相反するものではない。従つてそれは眞の生命といふものではない。絶對の否定が肯定と云つても、連續的過程と考へられるかぎり、それは一つの種の生命といふものに過ぎない。そこには尙眞に個の獨立といふものはない。個は種の奴隸である。我々は種から生れる

が、我々は又種を形成し行くものでなければならぬ。そこに眞の生命があるのである。生命とは多と一、分裂と統一との矛盾的自己同一でなければならぬ。生は死を含み、死は生を含まなければならぬ。然らば、種から生れながら種を形成し行き、時には種を破るとすら考へられる個とは何に基礎附けられるのであるか。かゝる個の方は何處から來るのであるか。それは所謂論理學に於て考へられる如き單なる一つの個といふ如きものではない。かゝるものは、さういふ力を有つことはできない。それは種として自己自身を限定する辯證法的一般者の自己限定(種の逆限定)に基礎附けられて居るものでなければならぬ、即ち世界歴史的なるもの、創造的なるものに基礎附けられてゐなければならぬ。辯證法的一般者の個といふ性質を有たなければならぬ。種は辯證法的一般者の種として、個は辯證法的一般者の個として、種と個と相對立し相限定するのである。種は形を有ち自己自身を限定するものとして、個に對し個を限定するものでありながら、個から限定せられ、種を離れて個といふものはなく、個は種から生れ、何處までも種から限定せられるものでありながら、種を限定するのである。現實はいつも現實を越え行く所に現實があり、生命は矛盾の自己同一として形成的であり、いつも種として固定せる形を有しながら、形を破り行く可能性を有つ所に、生命があるのである。故に種は現實に於てあるものとして、自己自身の否定を含むかぎり、それは生きた種であるのである。然ら

ざれば、死せる形に過ぎない。種が現實であるのではない。種とは辯證法的自己同一として自己自身を限定する現實の形である。かゝるものとして、それが創造的と考へられるのである。種は歴史的現實の形成作用として、生命を有つのである。辯證法的一般者の特殊として一般的であるといふことは、抽象的一般となることではない、世界歴史的に生きることである。ドールフェの引用したランケの言によれば「近代の趨勢」の序文、地上に他と接觸せない民族といふものはない。それ自身の特異性を以て、世界歴史的關係に入り込み、世界歴史に何等かの變化を起すかぎり、それが歴史的であるのである。又云ふ、歴史は一つの哲學的體系をなすものでもなければ、又內的連絡のないものでもない。歴史は相次いで生起し互に相制約する出來事の系列である。互に相制約するといふことは、絶對必然といふことではない。歴史は人間の自由なる活動の舞臺である。併し自由には力が伴はねばならぬ。瞬間にいつも新しいものが起り得る。何物も唯他の爲にあるのではなく又何物も亦單に他となるのではない。而もそこに何人もそれに従屬せざるを得ない深い內的連絡が支配して居るのである。自由の傍に必然が存續するのである。既に成つたものが將に成らんとするものと連絡を有つて居る。此連絡は如何ともすることのできないものである。それが一つの統一として認識對象となる。斯くして互に結合せられた出來事の系列が歴史の「世代」といふのである。

歴史を決定し行くものは、個といふものでもなければ、種といふものでもない。創造的に自己自身を形成するものである。時代が時代自身を限定するのである、現在が現在自身を限定するのである。自由の傍に必然が存続する、それが歴史的自然と考へられるものである。そこに歴史的习惯とか歴史的技术とかいふ如きものも考へられるのである。現在が現在自身を限定するといふことは、現在に過去未來が同時存在的といふ現在自身の自己矛盾によつて自己自身を限定し行くを云ふのである。そこにはいつも現在の立場から全體的なもの、創造的なものに觸れる、或は逆にさういふものが働くといふことができるのである。そこに世界が創造的となる、我々は創造的世界の創造的要素となる。我々は個が働くと考へるのである、世界が個性的となるのである。併しそれは種がなくなると云ふことではない、種が辯證法的一般者の種として、自己自身を限定する特殊者として生きることである。個が個として創造的となるといふことは、單に孤立的に個となると云ふことではない、一般の特殊としての種の使命を果すことである。故に世界が創造的となるといふことは、世界が個性的に自己自身を限定することである。自己自身を越え自己自身を限定する現實は動搖的である。一面には混亂的であり、滅亡的でもある。世界が辯證法的に自己自身を決定する、即ち個性的に自己自身を形成するといふことは、一面に無限なる混亂と滅亡とに對することではなければならぬ。創造的となればなる程、然云

ふことができる。前者は永遠の今の自己限定として時が消される方向である、それは我々の回避の方向である。そこでは我々は種を離れて抽象的個人的となり、却つて自己自身を失ふのである。死せる種となることが我々の死であると共に種を離れること、非形成作用的となることも、我々の死である。之に反し、創造的方向といふのは永遠の今の自己限定として時が充實し行く方向である。そこに現在を中心として、(辯證法的自己同一的に)永遠の今が自己自身を限定するのである。それは辯證法的一般者の自己限定として個が何處までも個となることである、自己自身を限定する個物となることである。創造作用といふのは、すべての個が個となることではなければならぬ。而もそれは抽象論理の立場から考へられる如く、種がなくなるといふことではない。個が何處までも創造的即ち形成作用的となることである。

種と個とは對立する。併しそれは種は辯證法的一般者の種として個も辯證法的一般者の個として相對立するのである。種が種として單に因襲的に固定することは死である。ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ行くことは、一面に種の分解であるが、一面に種の發展でもある。後者の方向に於て、辯證法的一般者の自己限定として、そこに世界歴史的なものが働くのである。そこに我々は行爲的直觀的に形を見るのである。それを我々がイデア的なものに觸れると考へることもできる。種が歴史的世界の創造力となるのである。それを生きた形といふのである。

私の行爲的直觀によつて見られる形といふのは、心像の如きものをいふのではない。今日の物理學に於て直觀像といふものがなくなつたと云つても、私は物理學が私の所謂行爲的直觀を離れたとは考へないのである。古典的物理學に於ての直覺的な表現といふものは、實は物理學的な物の見方に於て不純なものであつたのではなからうか。所謂直覺も行爲的直觀ではあるが、行爲的直觀は單に所謂直覺ではない。行爲的直觀といふことは、作用が對象の中に入ることである。それは世界を主觀的と考へることではない。我々の作用が實在の補足の一面となることである。行爲的直觀的に我々の心像を除去して、眞に客觀的世界の形を見るといふことができ。我々の知識が創造的世界の自己表現となるのである。無論、同じく形といふもその性質の非常に異なるものであり、寧ろ相反するものであるが、藝術的に物の眞の姿を映すといふことも、作用が對象の中に入ることである。何の場合に於ても、種と個とは對立すると云つても、種が辯證法的な一般者の種であり、個が辯證法的な一般者の個であり、辯證法的な一般者の自己限定として、辯證法的に動き行く所に、世界のあると考へることができる。我々が働くといふには、何等かの形によつて働くのである。種は形である、パラデーグマである。併し個が種から生れながら逆に個が種を形成し行くかぎり、行爲的直觀的に物を見て行くのである。

併し右は歴史的世界に於ては、種と個との關係は、いつも辯證法的な一般者の種と個として考

へられねばならないことを述べたのに過ぎない。辯證法的な一般者の自己限定としての歴史的世界の辯證法的發展は「四」の終に於て云ふ如く、環境が主體を作り、主體が環境を作り、世代から世代へ移り行くにあると云ふことができる。右の問題は更にかゝる立場から論せられなければならぬ。「五」に於て多少此問題に觸れて置いた。」(未完)